

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32702

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21H01521

研究課題名（和文）近代日本のセツルメントハウスと公営住宅に関する史的研究 - 英・米の動向を参考として

研究課題名（英文）Historical Research on the Settlement and Public Housing of Modern Japan referring to the Movement in the UK and USA

研究代表者

須崎 文代 (SUZAKI, Fumiyo)

神奈川大学・建築学部・准教授

研究者番号：20735071

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代住宅史、近代建築史、生活学、社会学等の複合的観点から英米日のセツルメント運動の展開について検討し、セツルメントハウスの建設とその建築的特徴や建築家の関与を明らかにすることを目指した。特にロンドン、シカゴおよび国内主要事例について現地調査を行い、トインビー・ホール、ハル・ハウス、極楽寺（小千谷）に関しては、アーカイブ資料や現存遺構の視察・実測等の現地調査によって基礎情報の蒐集分析を実施し、建設経緯や建築的特徴、設計者に関して新たな知見を明らかにした。本研究の成果は、草創期の動向に関する基礎的研究として位置づけられ、一定の情報を蒐集整理し、新たな見解を呈示できた点で評価できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、欧米で先駆的に実践されたセツルメントハウスおよびその日本国内での導入と展開について、これまで不明であった建設動向や建築的特徴について明らかにすることを旨とするものである。セツルメント運動は、社会改良家や知識人・学生が協力して労働者や移民と共同生活を営みながら貧困層の居住環境の改善を目指したもので、相互扶助による共同家事や住居管理、建築的解決の取り組みは社会住宅の基礎の形成に貢献したといえる。そのため、本研究の成果は集合住宅の歴史に新たな知見を加えるとともに、共同性にもとづく生活環境改善の実践についても、コミュニティ形成が再検討される今日的課題に有益な知見を呈するものとなると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to investigate the development of the Settlement Movement in the UK, the US, and Japan from an interdisciplinary perspective, including history of modern housing, history of modern architecture, lifology, and sociology. It focused on elucidating the construction process and architectural features of settlement houses as well as the involvement of architects in them.

Through field surveys on typical examples particularly in London, Chicago, and Japan, we collected and analyzed basic information on Toynbee Hall, Hull House, and Gokurakuji (Ojiya) using archival materials and on-site investigations and measurements of existing building structures. This allowed us to shed new light on their construction processes, architectural features, and designers. The results of this research are positioned as foundational researches on the early trends of the movement, and it is commendable for gathering and organizing a certain amount of information and presenting new insights.

研究分野：近代建築史

キーワード：トインビー・ホール イライジャ・フール ハル・ハウス ポンド兄弟 共同家事 隣保館 善隣館
今和次郎

1. 研究開始当初の背景

産業革命による都市部の居住環境の荒廃は、イギリスが直面した課題であった。特にコレラ・チフス等の伝染病の流行によって衛生環境の改善は不可避の問題となり、エドウィン・チャドウィック(1800-1890) やオクタヴィア・ヒル(1838-1912) 等の社会改良家によって居住環境を改善するための実践が展開された。具体的な方策としては1834年の新救貧法、1848年の公衆衛生法、1851年の宿泊住宅法、1866年の労働者階級住宅法と、世界に先駆けて住環境改善の法律が制定され、1875年にはスラムクリアランス及び再居住を目的とした職人・労働者住居改良法が定められた。こうした時代背景から、19世紀後半のイギリスでは貧民救済を目的とした住宅改良が社会運動として展開された。このうち特筆すべきものに、慈善家らによって実践されたセツルメント運動がある。その主要な事業として、低所得者の生活改善を目指す啓蒙活動と相互扶助による生活改善の拠点として建設されたのが「セツルメントハウス」である。

最初の実践は、1884年にロンドンに建設されたトインビー・ホール Toynbee Hall で、先駆的な取り組みとして同時代の欧米や日本へも紹介され、各国のセツルメント運動に影響を及ぼした。アメリカでは、トインビー・ホールを視察したジェーン・アダムス(1860-1935)らによって、同国内での嚆矢となるハル・ハウス Hull-House が1899年に建設された。その後、1920年代迄に約500ヶ所のセツルメントハウスが建設されたという。

開国以降の日本では、伝染病対策を中心とする環境改善が衛生先進国であるイギリス・ドイツを参考として取り組まれた。その活動は医学分野が先導し、大日本私立衛生会(1883)、大日本婦人衛生会(1887)が設立され、都市や家庭生活、住宅における衛生の問題が議論された。また森林太郎(1862-1922)はドイツに学んで住居衛生を論じ、大江スミ(1875-1948)はイギリス衛生学を専門的に修め、日本の住居衛生論に影響を与えた^{*1}。こうした衛生を主眼とした住宅改良は、日本の住宅近代化における重要な基盤となった。

住宅改良の具体的な方策としては、1888年に東京市区改正条例が制定され都市構造の改変と衛生・防火等への対応が始まる一方、不良住宅地区改良事業としてスラムクリアランスにも取り組まれた。例えば大阪府は「長屋建築規則」を発して貧民居居の一掃を図ったが、森はこうしたスラムを単に追放するだけでは問題解決とならず「移住すべき居宅の供給と一体として実行され」る必要性を指摘したように、徐々に貧困層の住宅供給が重視されていった。

このような状況下で、日本でもセツルメント運動の黎明が見られた。宣教師アリス・ペティー・アダムスらが明治20年代に建設した施設(岡山博愛会)や片山潜がトインビー・ホール訪問後の1897年に設立したキングスレーホール(東京)が初期のもので、これらの私設事業が公的な動きよりも先行していた^{*2}。その後、「隣保館」(同潤会では「善隣館」)と称され、総じて住宅改良と教育・保育・福祉などの機能を含むセツルメントが建設された。実際に行政関与のもとで組織的かつ本格的に住宅問題の調査が実施されるのは1920年代以降である。代表的なものとしては、後述する「帝大セツルメント」(1923)、「東北セツルメント」(1925-)や、同潤会の東京市猿江裏町アパート(1925-26)、横浜市南大太町アパート(1927-29)、東京府による西巢鴨アパート(1927-33)等の不良住宅地区改良事業が展開された。

(*1 須崎文代「大江スミのイギリス留学による明治期の住居衛生論の導入と国内での展開に関する研究」(16K18222 若手(B) 2016-2019年度) *2 祐成保志『住宅の歴史社会学』新曜社2008年)

2. 研究の目的

上記の動向を鑑みて、本研究は英米で先駆的に建設されたセツルメントハウスとその日本国内での展開について、建築的特徴や生活改善などに着目して明らかにすることを目的とする。積層型の近代的アパートメントは、19世紀中葉から産業革命に起因する欧米都市の人口集中に対するひとつの解決策として発達したものである。工場労働者や移民などの貧困層の住まいはテネメント・ハウスと呼ばれる低質な賃貸集合住宅が中心で、それらの衛生環境(採光・通風・清掃等)の改善が課題となっていた。そうした居住環境や生活の改善を目指したのが上記の運動であり、そこで試みられた住居管理や建築・設備の改良は社会(公営)住宅の基盤形成に少なからず影響したといえる。日本国内における近代的集合住宅は、軍艦島アパート(1910)、上野倶楽部(1910)、お茶の水文化アパートメント(1925)、同潤会アパートメント(1925-)が先駆とされるが、本研究ではセツルメントハウスの検討を通して、集合住宅の歴史に新たな知見を加えることを目指す。また、同運動で実践された相互扶助による生活改善の仕組みについても明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、まずセツルメント運動の先駆に関する調査として、英米の主要なセツルメントハウスの建設動向や建築的な特徴を捉える。さらに、英米の先駆例から影響を受けた近代日本のセツルメントハウスの展開を明らかにするために、日本国内での動向と独自性を検討する調査分

析をおこなった。

なお、本研究の研究組織は、近代住宅史を専門とする須崎文代（研究代表者）、水野僚子、内田青蔵、近代建築史・保存論を専門とする田中和幸、印牧岳彦、姜明采、倉田慧一（研究協力者）、井口力哉（研究協力者）、社会史学を専門とする泉水英計（以上全て学位保有者）により構成し、複合的観点からセツルメントハウスの展開と特徴を総合的に分析するものである。

4. 研究成果

(1) 総括

本研究では、英米日におけるセツルメントの展開と建設動向について資料収集と現地視察を中心として基礎調査を進め、それらから得られた情報について整理と分析をおこなった。研究期間のうち1～2年目（2021～2022年度）においては、Covid-19感染拡大の影響により海外や地方への渡航が制限されたことにより、調査研究の進行が当初の計画通りには進められない状況となり、計画変更を余儀なくされた。しかし2023年冬以降は、その遅滞を回復すべく調査研究を実施し、成果の一部について各種学会で研究発表をおこなった。

上記を鑑みて本研究の成果を総括すれば、セツルメントハウス草創期の状況を捉えるための基礎的研究として一定の知見を整理することができたと評価できる。とくに、個別の事例として重要なトインビー・ホール、ハル・ハウス、日本国内の青木山極楽寺に関しては、現地におけるアーカイブ資料の調査、現存遺構の視察・実測等によって基礎情報の蒐集と分析を実施し、それらをもとに建設経緯や建築的特徴、設計者に関して新たな知見を得ることができた。

しかしながら、数あるセツルメントハウスに関して個別かつ詳細な研究をおこなうまでには至らず、後述のとおり今後の課題となっている。

(2) トインビー・ホールおよびロンドンのセツルメントハウス

英国におけるセツルメント運動の建築的遺構に関する調査として、2023年2月にトインビー・ホール（図1・2）をはじめとするロンドンのセツルメントハウスの視察および実測をおこない、現況遺構および運営状況の確認と実測調査等を実施した。同時に、ロンドン・メトロポリタン・アーカイブス（LMA）において関連する文献・図面資料の調査を実施した。また、同運動の特徴としてオックスフォード大学・ケンブリッジ大学・ロンドン大学等の学生の関与が挙げられ、本研究ではとくにオックスフォード大学において視察調査を実施した。

これらの調査結果の一部をもとに、同館の建築的特徴や設計者である建築家イライジャ・フールの思想とのその関係について、フールによる同時期のコテージ群（図3）や労働者住宅の設計活動と合わせて検討をおこない、デザインの傾向やオクタヴィア・ヒル、ジョン・ラスキンらの思想との関与を明らかにした。また、トインビー・ホールのセツルメント運動に関与した建築家であるチャールズ・ロバート・アシュビーにも注目し、アート・ワーカーズ・ギルドを含むアーツ・アンド・クラフツ運動との関連について検討を進めた。これらの知見の一部については、2023年度日本建築学会大会学術講演会において成果の発表をおこなった。

なお、本調査の結果、後述するハル・ハウスの創設者ジェーン・アダムズほかセツルメント運動の関係者や社会改良家の多くは同館を訪問した経験を有したことが判明し、同館の影響は各地に及んでいたことが確認された。

(3) ハル・ハウスおよびシカゴのセツルメントハウス

アメリカにおけるセツルメント運動に関する調査として、2023年8月にシカゴ市において遺構の視察と資料調査をおこなった。代表例であるハル・ハウスに加え、ノースウェスタン大学セツルメント、旧シカゴ・コモンズ、エイブラハム・リンカーンセンター等を視察した。ノースウェスタン大学セツルメントは現在もセツルメントとしての運営がおこなわれており、運営者に聞き取りを実施し、リンカーンセンターについても運営者等への聞き取り調査と内部空間の確認をおこなった。また、イリノイ大学シカゴ校所蔵のハル・ハウス・コレクションと、シカゴ美術館所蔵のポンド兄弟による図面等（ハル・ハウス設計者）の調査

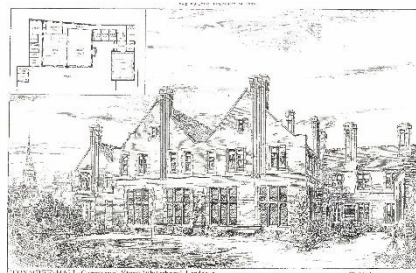


図1 トインビー・ホール、図面（平面図）および外観（出典：The Builder, 14 Feb 1885）



図2 トインビー・ホール外観（E・フール設計、1884年、2023年2月印牧撮影）



図3 レッドクロスガーデンのコテージ群（E・フール設計、1888-90、2023年2月印牧撮影）

をおこなった。とりわけハル・ハウスについては、運動の発展に伴って増改築を繰り返した同館の建設経緯と建築家ポンド兄弟の設計思想について検討すると同時に、アダムスらによる労働者生活の豊かさを改善しようとする試みや家事共同化に関する思想の展開に注目し、さらに同運動を社会へと開き広めることに役立った共同キッチンやコーヒーハウスの存在を明らかにした(図4・5)。さらに、同館を拠点に設立されたシカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会の展開や建築家フランク・ロイド・ライトの関与などについても検討を進めた。その成果は、2023年度日本生活文化史学会研究発表会にて発表をおこない、さらに2024年度日本生活学会研究発表大会、2024年度日本建築学会大会学術講演会において発表予定である。



図4 コーヒーハウス内観 (Hull House Yearbook p. 40)

(4) 日本国内におけるセツルメント運動の展開とセツルメントハウスの建設

① 日本国内における導入と展開の萌芽的動向

セツルメントハウスの世界的先駆であるトインビー・ホールに関する国内での紹介は、日本におけるセツルメント運動の展開を検討するうえで重要だと考えられるが、これに関する既往研究はきわめて限定的である。近代日本のセツルメント運動についての歴史研究は主に教育・社会福祉学の分野で取り組まれてきたが、その黎明期におけるトインビー・ホールの理念や活動の導入過程、さらにはその建築について明らかにした研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、明治・大正期におけるこの理念の受容の過程について、文献および記録の蒐集整理を実施し、同運動の紹介や評価に着目して検討をおこなった。その結果、管見の限りでは、トインビー・ホールを公的に紹介した最初の文献は土田弘敏『貧民救助論』(明治35(1902)年)であり、これを皮切りに日本国内でセツルメント運動が徐々に伝えられ、近代日本の教育・福祉のあり方に影響を与えていた。大正期以降、セツルメント運動は海外情勢の知識としても、実際的な活動の面でも本格化する。とくに、大林宗嗣『ソーシャルセツルメント事業の研究』(大原社会問題研究所出版部、大正10(1921)年)、続いて『セツルメントの研究』(同人社 大正15(1926)年)はこの時代における同運動について体系化されており、さらに同年には、社会局社会部が『トインビー、ホール』を刊行した。これらの内容と評価は国内のセツルメント運動が本格化していく過程で基準線となったことは言うまでもない。具体的に、各自治体の隣保館、同潤会の善隣館、帝大セツルメント(図6)や農村セツルメントなどが多様に展開し、公的な共同住宅の建設における集住のデザインに影響を与えた動きが確認された。とりわけ、建築家今和次郎によるセツルメント設計の関与については特筆すべき動向として注目された。こうした動向のうち、黎明期における日本国内での導入については2023年度日本建築学会学術講演梗概集に報告した。

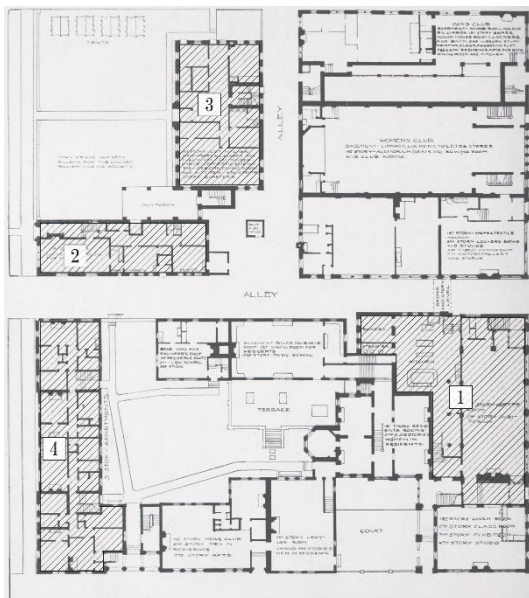


図5 ハル・ハウス：協同家事が実践された主要施設(井口、日本生活学会大会発表梗概集2024)

② 仏教系セツルメント

日本国内で独自に展開したセツルメントの事例として、戦前の仏教界で実現されたセツルメントに注目した。その代表例として、大阪の光徳寺住職であった佐伯祐正については広く知られ

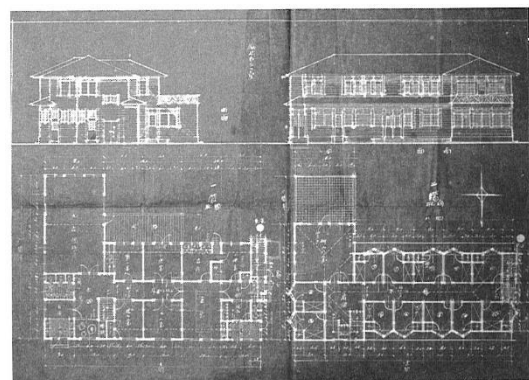


図6 帝国大学・U・セツルメント、南・西立面図、一・二階平面図(今和次郎設計、1923、同コレクション所蔵)

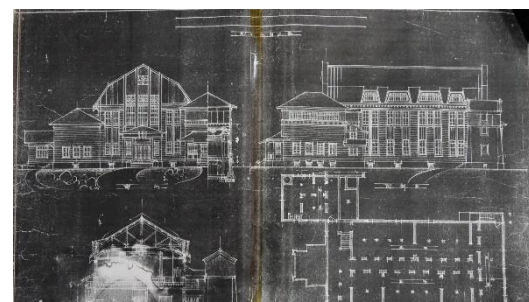


図7 極楽寺洋風本堂設計図面(1926年竣工、極楽寺所蔵)

ているなか、本研究では文献『寺院とセツルメント』に寄稿していた麻田昭道が建設したセツルメントとその運動に着目した。浄土真宗本願寺派の仏僧である麻田は、新潟県小千谷市の青木山極楽寺の16代住職で、それまで同寺院の本堂として使用されていた伝統的な形状の木造本堂を解体し、セツルメントに対応した洋風本堂を大正15年に竣工させたことが明らかとなった(図7・8)。この建物はすでに平成10年に解体されているが、同寺院の文書として保管されている設計図書に加え洋風本堂を建設するに至った背景を記した文書類が発見され、これらを読み解くことで、麻田自身の来歴においてセツルメント思想の受容が見いだされ、また我が国における仏教界とセツルメントに関する新たな一面を明らかにすることができた。この成果については、2021年度、2022年度の近畿大学工業高等専門学校研究紀要において報告をおこなった。



図8 極楽寺洋風本堂工事写真(極楽寺所蔵)

③ 地方都市におけるセツルメント

まず、日本国内の嚆矢である岡山における社会事業とセツルメントハウスについて、岡山県立図書館守屋茂関係文書「韜光文庫」の文書類の読解と整理をおこなった。守屋茂は、1925年に岡山県庁に奉職して以来、1946年に厚生省に異動するまで同県社会事業行政を實踐し、同時に、社会事業関連記録の蒐集整理に努め、『岡山県下に於ける慈善救済史の研究』や『岡山県社会事業史』といった地域社会事業史を著している。岡山は、笠井信一の濟世顧問制度やアリス・アダムスによる日本初のセツルメント(花畑岡山博愛会施設)など先進的な社会事業の試みがみとめられる。近代日本の社会事業を示す好例を描くために、「韜光文庫」に残された記録の読解と整理を進め、現存する岡山禁酒会館の視察をおこなった(図9)。

また、産業系セツルメントの事例として、千葉(野田・銚子)に現存する現銚子市中央地区コミュニティーセンター(旧財団法人公正会本館)(1926年)、興風会館(1929年、図10)について具体的な調査をおこなった。前者の公正会はヤマサ醤油株式会社、後者の興風会はキッコーマン株式会社、いずれも産業ユートピアとして建設された隣保館の一種として捉え、検討をおこなったものである。いずれも鉄筋コンクリート造のセセッション系モダニズム建築であり、公民館・文化施設のように残っているもの貴重な遺構として位置づけられた。さらに、戦前期の横浜における公的なセツルメントハウスとしての隣保館(図11)の設立や福井における公的な乳児院等の社会福祉施設の開設についても、いくつかの知見が明らかとなった。以上の成果の一部は、2022年度および2023年度の日本建築学会学術講演会において発表をおこなった。

(5) 課題と今後の展望

以上のとおり、本研究ではセツルメント運動の展開にともなうセツルメントハウスの建設について基礎情報の蒐集整理に努め、国内外の主要事例を取り上げて調査研究をおこなった。その結果、一定程度の成果を挙げ、その一部は関連学会での発表および関連誌におけるアウトリーチ活動として公開した。コロナ禍により調査研究活動が制約され、海外調査が儘ならない状況にあったが、基礎的研究としては確実に一定程度の成果を挙げることができたと考えられる。しかしながら、セツルメントハウスの展開について全体像を捉えるまでには至らず、当初計画した書籍の刊行までは及ばなかったため、今後の課題として残されることとなった。また、上記の研究成果で記したように、同運動に関与した建築家の動向については重要な可能性が示唆され、今後さらに継続して調査研究を進めていく予定である。

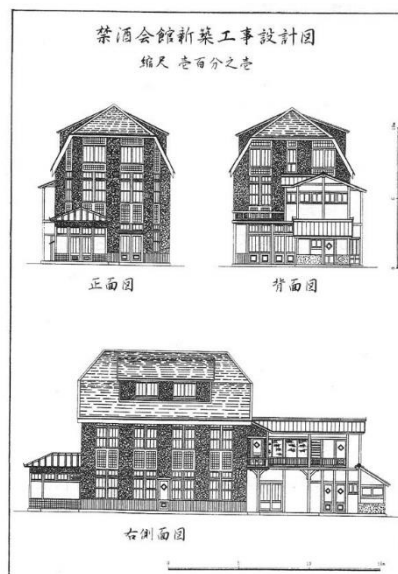


図9 岡山禁酒会館、新築工事設計図(1923年竣工、同館公式HP)



図11 興風会館外観(1929竣工、同館公式HP)



図10 横浜第一隣保館南太田町(横浜市・同潤会、1928-1930竣工、須崎所蔵写真)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 須崎文代	4. 巻 112
2. 論文標題 ひろば 家事労働の共同化を通じた生活共同体の探求	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 すまいるん	6. 最初と最後の頁 42 - 45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須崎文代	4. 巻 2024.04
2. 論文標題 近代史における共同性と食空間	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 a+u（エー・アンド・ユー）特集：食をめぐる建築	6. 最初と最後の頁 0-0
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中和幸、水野僚子、須崎文代、内田青蔵、泉水英計、印牧岳彦、姜明采	4. 巻 16
2. 論文標題 戦前のセツルメントと新潟県小千谷市極楽寺の住職・麻田昭道 - 京都帝国大学文科大学文学部の選科生 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 近畿大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 77-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 須崎文代	4. 巻 15
2. 論文標題 近代における生活共同体の探求ーセツルメントハウスを中心としてー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 土香る会会報	6. 最初と最後の頁 8-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中和幸、水野僚子、須崎文代、内田青蔵、泉水英計	4. 巻 15
2. 論文標題 戦前のセツルメントと新潟県小千谷市極楽寺の住職・麻田昭道 - 東北帝国大学農科大学の予科を通して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近畿大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 97-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 須崎文代	4. 巻 112
2. 論文標題 家事労働の共同化を通じた生活共同体の探求	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 すまいるん 2023年冬号 特集:「コモンズと住まい」	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井口力哉・須崎文代・印牧岳彦
2. 発表標題 セツルメントハウスにおける共同キッチンの史的研究 その1 ハル・ハウスのコーヒーハウスに着目して
3. 学会等名 日本生活文化史学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 井口力哉・須崎文代・印牧岳彦
2. 発表標題 セツルメント運動における共同家事のための施設に関する一考察 ハル・ハウスの建築群を事例として
3. 学会等名 日本生活学会2024年度大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 須崎文代・印牧岳彦・井口力哉・倉田慧一・水野僚子・田中和幸・泉水英計
2. 発表標題 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(1)近代シカゴにおけるセツルメントハウスと同館の役割に関する一考察
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 倉田慧一・須崎文代・印牧岳彦・井口力哉・田中和幸・泉水英計
2. 発表標題 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(2)都市シカゴにおける位置づけ
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 印牧岳彦・須崎文代・井口力哉・倉田慧一・水野僚子・田中和幸・泉水英計
2. 発表標題 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(3)設計者アレン・B・ポンドの建築論について
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 井口力哉・須崎文代・印牧岳彦・倉田慧一・水野僚子・田中和幸・泉水英計
2. 発表標題 《ハル・ハウス》に関する建築史的研究(4)ハル・ハウスの建築群拡大の変遷
3. 学会等名 2024年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 水野僚子・印牧岳彦・須崎文代・田中和幸・泉水英計・姜明采・内田青蔵
2. 発表標題 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (1) トインビー・ホールの建築的特徴とその評価について
3. 学会等名 2023年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 印牧岳彦・水野僚子・須崎文代・田中和幸・泉水英計・姜明采・内田青蔵
2. 発表標題 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (2) 建築家Elijah Hooleの活動について
3. 学会等名 2023年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 須崎文代・印牧岳彦・水野僚子・田中和幸・泉水英計・姜明采・内田青蔵
2. 発表標題 英国のセツルメント運動に関する建築学的研究 (3) 日本国内におけるトインビー・ホールの理念の受容について
3. 学会等名 2023年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 姜明采
2. 発表標題 戦前期における神奈川県社会施設に関する一考察 - 神奈川県匡済会が手がけた横浜社会館と川崎社会館を中心に -
3. 学会等名 2022年度日本生活文化史学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 姜明采・内田青蔵
2. 発表標題 戦前期における横浜市隣保館について
3. 学会等名 2023年度日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 和幸 (TANAKA Kazuyuki) (50805520)	近畿大学工業高等専門学校・総合システム工学科 都市環境 コース・准教授 (54103)	
研究分担者	印牧 岳彦 (KANEMAKI Takahiko) (00962888)	神奈川大学・建築学部・助教 (32702)	
研究分担者	泉水 英計 (SENSUI Hidekazu) (20409973)	神奈川大学・経営学部・教授 (32702)	
研究分担者	姜 明采 (KANG Myungchae) (30966693)	神奈川大学・建築学部・助教 (32702)	
研究分担者	内田 青蔵 (UCHIDA Seizo) (30277686)	神奈川大学・建築学部・教授 (32702)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	水野 僚子 (MIZUNO Ryoko) (80736744)	日本大学・生産工学部・助教 (32665)	2023年度より所属異動に伴い研究協力者に変更

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	倉田 慧一 (KURATA Keiichi)	東京大学大学院・工学系研究科建築学専攻・博士後期課程 (12601)	
研究協力者	井口 力哉 (IGUCHI Rikiya)	神奈川大学大学院・工学研究科建築学専攻・博士前期課程 (32702)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関